

教育旅行フェア(展示ブースのご案内)

“社会との接点を創出する”アクティブラーニング型プログラムや英語キャンプ(主に国内)、英語を活用した海外での実践的な活動・将来のキャリア育成につながる体験など、国内外に広がる様々な教育プログラムと教育素材のご案内をブース展示形式で紹介しました。ご来場いただいた皆様の新たな取り組みや既存の旅行行事の見直しのヒントとなる情報を得ていただくとともに、“相互交流の場”の提供も実現いたしました。



	ブース	主な内容
テーマ系	海外研修旅行・国内事前事後学習(よろず相談所)	世界に広がる「JTBのスタディーツアー」や、国内で行う「事前・事後学習素材」のご紹介
	「つくばサイエンスエッジ」「グローバルリンク・シンガポール」	つくばで行われているサイエンスアイデアコンテストやシンガポールで開催している国際コンテスト
	オンライン英語学習・フィリピン英語研修	フィリピンのネイティブ講師と行うオンライン学習/現地研修
	国内英語キャンプ	ハーバード大生や留学生、ネイティブ講師などを行う国内英語キャンプ
	アメリカ高校交換留学・大学進学	日米学術センター、栄陽子留学研究所との連携プログラム
国内系	主権者教育「あなたの一票が日本を変える」	東洋大法学部学生による模擬選挙型教育プログラム
	キャリア教育「CASプログラム」「キャリア甲子園」	(株)マイナビとの協業によるキャリア学習プログラム
	キャリア教育「フジテレビのお仕事!」	スタジオで本格TV機材を使った番組制作体験プログラム
	テーマ×アクティブラーニング(東京)	東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会を題材にした、留学生や新聞記者とのワークプログラム
	ICT×教育旅行「コラボノート for School Trip」	タブレットを使った「協働学習型」班別研修実践ツール
	地域×アクティブラーニング(長崎・弘前)	地域の人たちとの交流を通して社会課題にアプローチするアクティブラーニングプログラム「社会との接点シリーズ」のご紹介
	地域×アクティブラーニング(沖縄)	
	ピックアップエリア(関西)	「関西エリア」の新しい教育素材・プログラムのご紹介
ピックアップエリア(北陸)	今注目の「北陸エリア」の教育素材・プログラムのご紹介	
海外系	ピックアップエリア(香港・マカオ)	これから注目の「香港・マカオ」の教育旅行情報のご紹介
	ピックアップエリア(ベトナム・台湾)	人気の「ベトナム」「台湾」での新しいプログラムのご紹介
	ピックアップエリア(シンガポール・マレーシア)	「シンガポール」「マレーシア」の最新情報のご紹介
	ピックアップエリア(ハワイ)	今注目の「ハワイ」の新しいプログラムのご紹介(ホノルルフェスティバル、プロジェクトパラダイス、サイエンス関連)

<これまでの開催内容>

- 第1回/2008年8月20日「生徒のやる気をいかにして引き出すか?」
京都市立堀川高校 荒瀬校長、東京学芸大学 杉森准教授による講演と、パネルディスカッション「生徒のモチベーションの高め方」
- 第2回/2009年8月28日「キャリア教育と生徒のモチベーション」
早稲田大学大学院三村教授による講演。実践女子学園校長、フジテレビジョン、ベネッセコーポレーションなどによる事例紹介およびパネルディスカッション
- 第3回/2010年8月25日「これからの社会で求められる能力を育む」
村上龍氏を特別ゲストに招き、講演および対談「こどもの将来観の醸成がもたらすもの」
- 第4回/2012年8月22日「これからの社会が必要としているチカラとは?」
草野仁氏を特別ゲストに招いた講演、および第一三共株式会社、三井不動産株式会社によるパネルディスカッション等
- 第5回/2013年8月23日「これからの社会が必要としているチカラとは?」
ノーベル物理学賞・江崎玲於奈博士による基調講演「新しい世界を開くイノベーション—与えられるオプションを活かそう—」、教育学者・齋藤孝氏による特別講演「社会が必要としている「コミュニケーション能力」。その本質とは」、サントリー食品インターナショナル株式会社、株式会社サイバーエージェントによるパネルディスカッション等
- 第6回/2014年8月21日「これからの社会が求めるチカラ」
ミズノ株式会社社長で東京2020五輪招致活動でも活躍された水野正人氏による講演「若者よ、世界へ旅立とう!」、本間正人氏をファシリテーターに、早稲田大学政治経済学術院 白木教授、文部科学省初等中等教育局 河村視学官、株式会社モスフードサービスと株式会社日立製作所の人事担当者によるグローバル人材に関するパネルディスカッション

第7回学校ソリューションセミナー

[主催] 株式会社JTBコーポレートセールス

DIGEST REPORT

これからの社会が 求めるチカラ

~グローバル化する日本社会を見据えて~

2016年8月24日(水) 秋葉原UDX GALLERY



ご挨拶



株式会社 JTB コーポレートセールス
国際交流センター センター所長
松村幸博

先般のリオオリンピック閉会式で、2020年に向けて小池都知事に五輪旗が渡され、安倍首相が「マリオ」の姿で登場するサプライズが大きな話題を呼びました。全世界に向けて日本をアピールする際に、歌舞伎や侍ではなく「マリオ」を選んだということに、非常に驚きました。グローバル社会で日本を発信するにあたって多様な意見や価値があることを改めて認識しました。

2020年に向けてはオリンピックだけではなく、教育も大きな改革の時を迎えています。「戦後最大の改革」と言われ、先般、文科省より新学習指導要領の骨格が発表されました。

もの凄いスピードで社会変革が進む中、そこに対応した教育改革が必要だということに異論を唱える方は少ないと思います。問題はこの改革をどのように進めるかです。どのような目標を立て、どういった手法で進めるのかには多様な意見があり、明確な答えをお持ちの方はまだ少ないと感じています。我々は、皆様とこの教育改革にどう対応し、取り組んでいくか、共に考え、共有したいと考えております。本日がそのきっかけ、考えを深める機会になれば幸いです。

「Wonderland JAPAN！」 ～日本って？日本人って？～



コメンテーター

宮本 エリアナ 氏

2015年ミス・ユニバース日本代表
1994年5月12日生まれ。長崎県佐世保市出身。ミス・ユニバース日本代表にハーフの女性が選ばれたことで、当時大きな話題となった。現在は、その活動の経験を活かし、モデルやタレントとして多くのメディアで活躍中。



コメンテーター

Nicholas Hanpeter (川浪 航 ニコラス) 氏

グーグル株式会社 AdWords アカウント ストラテジスト
1991年東京生まれ。高校まで米国で過ごし、早稲田大学国際教養学部卒業。Google Japanに就職し現在に至る。「テクノロジーと人をつなぐ」、「世界の文化をつなぐ」をテーマに学生時代から世界的な企業や団体のプロジェクトに参画。

北:いきなりストレートな質問からスタートしますが、グローバル人材になるために「日本人としてのアイデンティティ」を持つことは大切だと思いますか？
エリアナ:それについて私も時々考えるのですが、その前にまず、私の中では「日本人って何だろう」という疑問があるんです。私自身、よく「何人(なにじん)ですか」と聞かれるのですが、私の場合は「ハーフです」と答えています。それ以外に何と言っていいのかわからないんです。日本で生まれて日本で育ちましたが、外見は日本人らしくない。日本のことを海外の人に伝えることが多いので、日本のことを知っておくべきだとは思っていますが、日本人としてのアイデンティティが必要なのかどうかはわかりません。

北:では、エリアナさんにとって「グローバル人材」の定義は？
エリアナ:日本人だから、アメリカ人だから、とかではなく、「いろんな方たちに対応できる存在」ということだと考えています。

ニコラス:アイデンティティとは、自分がどういう人なのかを知っているということだと考えています。だから非常に大事です。自分のことをわかっていれば、自然と自分が何をやりたいのかが生まれてきますし、何がやりたいのかわかれば目標プランをつくって自分らしく進めていきます。その結果、グローバル人材という「世界中で活躍できる人」になれるのかなとは思いますが、ただ、日本人としてのアイデンティティが必要だとは思いません。個人としてのアイデンティティがあればそれでいい、というのが僕の意見です。

北:お2人の意見からは、何人であるかより、その根底にある「個」が大事だということがよく伝わってきました。「グローバル人材」の定義を見てみると、「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ」と記載されています。でも、どこにも「日本人としてのアイデンティティ」というものが何かについて書かれていない。さて、先ほどエリアナさんが話してくれましたが、「日本人」とは何なのでしょう。

エリアナ:以前海外で聞かれた時には、「私は日本生まれで日本育ち、日本のパスポートを持ち、母国語は日本語です。これ以外に何かありますか？」と逆に質問したんです。

北:実は以前、一緒に仕事をしているアメリカ生まれハワイ育ちの27歳の若者に、同じ質問をしたことがあります。その時の彼の答えに驚嘆したのですが、彼は「私はオキナワンです」と言うんですね。なぜなら、小さい頃に沖縄出身の祖父・祖母に育てられて、沖縄の誇りというものを自分の精神的支柱として生きてきたからだそうです。そういうアイデンティティが彼の中にできあがった時に、既に国籍は関係なくなっていますよね。さて、そういう話もある中で、日本で生まれてほぼアメリカで教育を受けたニコラスさんは、どのように考えますか？

ニコラス:僕の考えでは、自分は日本人でもアメリカ人でもない。だけど両方でもある。そんなことは決められないんだということ。何人かと聞かれたら、「ニコラスです」と答えます。

北:よく言われますが、これまでは日本国内だけで全ての物事が片付いていました。しかし今は、そうではなくなってきています。一つの代表的な例が「偏差値」でしょう。いわゆる一般的な偏差値の分母にあるのは「その年に受験する人たち」ですが、では、グローバルの時代になった時に、その分母とはどんな人たちになるのでしょうか。つまり、どこで、誰と勝負をするのか、それを考える必要があるように思います。

ニコラス:どこで勝負したいのかといえば、自分の個性、パーソナリティです。数字的アベレージではなくて、「人間的な要素で勝負をしていきたい」といつも思っています。たとえばアメリカの学校ではスタンダードのテストはありますが、優秀な大学ほど点数は重視せず、これまでどうことをやってきたのか、どういう人間なのかを見られます。

エリアナ:私は後輩たちにセミナーで話をすることがあるのですが、これから何をやりたいかを聞くと、目標がない子が本当に多いんです。私は中学の時から自分も将来は起業すると決めて、そこを目指してきました。今年5月にその夢が叶い、トータルビューティーに関する事業を始めたのですが、その仕事をするために何が必要かを考えたときに、ミスコンに出ることが役に立つんじゃないかと思って出場しました。

北:お2人にとって、「世界にチャレンジする」のは当たり前のことですか？

ニコラス:そうですね。むしろ、世界にやりたいことができる環境があれば海外に行きますし、日本国内にあるのであれば日本にいるという感じでしょ

エリアナ:私もそうです。日本で頑張ることも素敵なことですが、いったん世界に出て、「この国ではどうなのかな」と自分自身で見つけていくことも重要ではないでしょうか。東京オリンピックもありますし、海外の国のことを肌感覚で知るのも大事だと思います。

北:つまり、周りにどんな環境・ポテンシャルがあるかを知らなければ、何が実現できるかもわからないということですね。だから若いうちに世界を知ることが大事だと。

エリアナ:そう思いますね。事情があって世界に行けないという人は、海外から日本に来る人がたくさんいるので、話してみるだけでもいいと思うんです。
北:ちなみに、エリアナさんがミス・ユニバースに出る前と後とでは、何が変わりましたか？

エリアナ:以前の私は、自分を隠そう隠そうとしていました。意見を言うことを抑えていたんです。髪の毛をストレートにしてコンテストに出たりして、「日本人らしく」と思っていました。ただ、世界でコンテストの上位に入る子はハーフが多くて、彼女たちに自分自身のことを聞くと、「人種なんて関係ない」って皆が言うんです。そういう経験の中から、別に日本人であることを変に意識する必要はないんだなってあらためて理解した感じですね。

北:体験的に世界を知ることの中から、自分自身がどうい存在なのか、どういう目標感を持ってチャレンジできそうなのかに気付けるということですね。

エリアナ:はい。私は新しい自分を知ることができました。
ニコラス:日本には世界に出ることが「目的」になってしまっている人が多いと思います。本来、自分のやりたいことを見つけていくプロセスの一部として、普段とは違う刺激を得るために海外に出ることが必要なのではないでしょうか。

北:目的と手段を取り違えたらいけないということですね。最後に2人にお伺いしたいのは、グローバル化が加速する今の時代に、「自己のアイデンティティの確立」という視点で学校教育に希望することはありますか？

ニコラス:僕は日本の高校生や若手社会人とワークショップをやる機会が多いんですが、そこで必ず伝えるのが「be yourself」、これは先生方ご自身にも伝えたいです。自分がやりたいこと、目標を考えることが大事だというメッセージです。個人を尊重し、自由に発言できる環境を作ってあげること。その方が意欲も増し、目標に向かって積極的に取り組めるはずですよ。

エリアナ:私は、一人ひとりの意見をちゃんと聞いてほしいと思います。あとは、親や友達など周囲に流される人が多いので、自分を持てるように導いてあげてほしいです。

北:結果、個性豊かな生徒を自分たちの授業でうまく活かし、周りの学びにも、本人の学びにもつながる、そういった生き生きとしたクラスが作れば良いと思いますよね。今日はどうもありがとうございました。



ファシリテーター 北 浩一郎 氏

御LbE Japan 代表取締役
1993年から「世界を舞台に活躍できる人材の育成」をテーマに、学校や企業の研修プログラムの開発と運営を手かけ、現在、年間約2万人に提供している。また日本で学ぶ約80カ国地域からの留学生約1,000人が参加する教育団体 Global Education Project(GEP)の創始者であり、GEP出身者とともに、世界各地での教育事業開発も行う。他に、SGH校アドバイザー、九州大学大学院フューチャージャプログラム講師などを務める。

「社会が求めるチカラ」 ～カギとなる主体性～



谷中:まずは、普段の活動内容についてお話しいただけますか。

辰野:私たちは「グローバルシチズンシップ＝地球志民」の意識を育み、その思いとともに「未来に何をGiFTできるのか」を考えていく取り組みを行っています。「グローバルシチズンシップ教育」は国連などで広く進められているのですが、これをGiFTではとてもシンプルに捉えています。まずは世界と繋がる前に自分と繋がる、自分を知ることから始まります。それから目の前の相手を知って、その相手と共に新たなものをつくって、そして最後が大切なのですが、ただ何かをつくるだけではなくて、それをこの瞬間から社会に貢献できるものにしていきます。これを「グローバルシチズンシップ・プロセス」と呼んでいます。そういったまず自分を知るための「舞台」として、GiFTでは海外研修などを用意しています。学生たちはただ海外に出るだけではなくて、未来に貢献したい、自分を知らないと考えて、同世代の仲間たちとともにその地域の課題と一緒に解決していきます。また海外研修の他にも、イベントなどいろんな挑戦を通じて「自分にとってワクワクすること」を探してもらいます。

久保田:「世界と繋がる前に自分とつながる」というところが響きました。当社でも「企業理念を理解する前にまずは自身の価値観を知ろう」というプロセスを大事にしています。私たちはミッションマネジメント、つまり「会社の企業理念に基づいて自分の思いを育んで行動に移すこと」を大切にしています。

谷中:現場には「マニュアル」というものがないそうですね。

久保田:レシピはありますが、サービス・接客のためのマニュアルはありません。行動指針として「ミッション」と「バリュー」と言うものを掲げていて、それに基づいて「一人ひとりが目の前のお客様に対してふさわしいと思うことをやる」という方針で行っています。

谷中:自分がふさわしいと思うことを、主体性と言えそうですね。

久保田:最初からは、なかなかできませんから、しばらくはそこを引き出すようなかたちで周りのメンバーが関わっていくことが大事だと思います。

谷中:その「引き出す」というところ気になりますね。

久保田:教育の中で大切にしているアプローチは「コーチング」と「フィードバック」です。必ず学習者が主体で、本人が考えて本人が行動する、そのために周りがどれほどサポートできるか、という「Learner Driven」という考え方です。
谷中:もう少し今回のテーマの「主体性」について話しを深めていきたいと思います。

辰野:現在「社会起業家」という肩書きをいただいています。きっかけが17歳の時にありました。実は私は中学・高校と英語の勉強を放棄していて、「日本人なんだから日本語がしゃべればいいじゃないか」と思っていたんです。そんな私の17歳の誕生日に、母親が「夏休みに一人で3週間スイスの国際会議に出席する権利」というものをプレゼントしてくれたんです。世界中から300人の政治家やビジネスパーソン、NGOのリーダー、難民といった人たちが集まって、世界で起っている紛争問題や環境問題、都市問題などについて話し合いながら、「国を変える前に、まずは自分の行動を変えないといけない」と意見交換を行う場でした。何とか3週間を過ごし、最後に感想を発表する場面です。その時に心から思ったこととして「いろいろな国の人が世界の平和について話しているのは素晴らしいこと。こういう場がずっと続けたいと思った」と発表したんです。すると参加者の一人のお年寄りから大きな声で怒鳴られました。「何を言っているの、あなたが続けていくんでしょ?」と。

谷中:すごい話ですね(笑)

辰野:それがターニングポイントで、私の主体性が生まれた瞬間でした。当たり前にあると思っていた平和って、誰かが作ろうと努力してきたからずっと続いているものなんだと。そこに気付いたときに、「だったら私がそういう場を作るプロになろう」と目覚めました。

久保田:「人生が変わった」とは、まさにこのことですね。「自分ごとにする」という意味で、私たちのお店では「Why you're here?」と言う言葉を大切にしています。つまり、あなたがここにいる意味を考えようということです。



コメンテーター

辰野 まどか 氏

一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト(GiFT)専務理事/事務局長
17歳の海外体験をきっかけにグローバル教育に目覚め、大学時代に世界100都市以上を訪れ、様々なグローバル教育を体験。コーチングファーム勤務後、米国にて異文化サービス・リーダーシップ・マネジメント修士号取得。米国教育NPO、内閣府主催「世界青年の船」事業コース・ディスカッション主任等を経て、2012年末に(一社)GiFTを設立。現在は高校、大学、企業を対象にグローバル・シチズンシップの醸成を目指した海外研修、事前事後研修、ワークショップ、講演等を行っている。



コメンテーター

久保田 美紀 氏

スターバックス コーヒー ジャパン 株式会社 人事部人材開発部 部長
外資系企業にて人事、組織・人材開発の仕事に従事。2010年6月 スターバックス コーヒー ジャパン(株)に入社。2012年、スターバックス初となるグローバル共通のバリエーションプログラムを導入。競争力の源泉となるアルバイトを含めた全ての人材が、企業理念に基づき自ら能動的にパフォーマンスを発揮できる環境を創出するため、2013年よりタレントマネジメントを展開中。米国CCE,Inc. 認定GCDF-Japan キャリアカウンセラー。

辰野:グローバル人材の定義の中にも「主体性」という言葉が入っています。ただ、一方で自分はそんなふうにはなれないと決めつけている学生が約半数いて、しかも「我が子は手遅れだ」と思っている親も約25%いるそうです。グローバル人材というものに対して、多くの人が「求められているが遠いもの」というイメージで捉えています。なぜそう思うのかとえば、憧れの人たちがスーパーマンに見えてしまうから。でも、実際はそうではないんだという事実を伝えることで、「だから、始めるなら今しかないんだ」という気付きにつながるのです。

谷中:なかなか興味深いですね。

辰野:GiFTの活動では、何かに取り組んだ後の「振り返り」にもしっかり時間をとります。何を感じたのかを徹底的に振り返る。その「深い内省」があるからこそ、感性が揺らぐような共感や自己効力感が育つのです。

久保田:「共感のプロセス」はとても大事にしています。ただのシンパシーでなく、共感して一歩行動するというところまでが私たちの共感プロセスだと捉えています。先ほど辰野さんがおっしゃった自己効力感が私たちの職場の中にもあるかなとは思っています。

谷中:御社には成長を促すための3つのステップがあると伺いました。

久保田:独自の分析により「スターバックスで人が成長できる3段階」としてまとめています。まず冒頭申しましたOurMission&Valuesという「何のために世の中に我々が存在するのか?」「どんな行動を大切にしますか?」というのが土台にあります。そして1つめは「自己存在の証明」で、「あなたにも役に立てていくことができるのですよ」と気づかせることです。自分のことを良く知って、まず自分の居場所を見つけるということが最初のステップになります。そこから「自分に対する期待感」という次のステップになります。これが辰野さんのお話にもあった自己効力感にもつながるものだと思いますが、やってみて周りからフィードバックをもらって「どうやったら始められるようになるんだろう」と、自分で考えて行動し出すサイクルが回り始めるフェーズです。最後は、自分ができたことを誰かに分け与えたいという気持ちが芽生えてくる、これが「他者への影響」という3つめのステップです。この3段階目で登ると、自分のお店だけでなく、地域や世の中に対して何ができるのかを主体的に考えるようになってきます。こういったものをベースにして、店舗ごとに計画してやっている地域活動の「コミュニティコネクション」や、高校生向けに夏休みに行く「ユースコネクション」というプログラムなども開催しています。

谷中:いろんなストーリーの中に、主体性を育むヒントがあると感じました。主体性を育むための切り口、また主体性の正体について、ヒントが得られたのではないのでしょうか。それでは最後に一言ずつ、来場者の方々にメッセージをいただければと思います。

辰野:実際に海外で活躍している人に会って聞いてみても、そのきっかけが中学や高校の時にあったという方は非常に多いです。一方、生徒たちによく聞かれるのは、「とはいつてもやりたいことがわからない」という話です。その時に私がいつも話すのが、大好きな冒険家の言葉です。「人は生まれた瞬間から等しく最高の人生を神様からギフトされていて、最高の人生に乗っかっているんだというのがわかるセンサーが誰にでもある。それがワクワクすることやドキドキすることなんだよ」というものです。

久保田:学校と職場一立場や環境は違いますが、目指しているものは一緒だと思っています。私も職場でのアルバイトという経験を通じて、大学生が社会に出る時に役立つことを伝えて送り出していくのだと考えています。若い人たちが活躍でき、しっかり生きていくための支援をそれぞれが目指していければと思います。



ファシリテーター

谷中 修吾 氏

ビジネスプロデューサー、BBT大学准教授
東京大学大学院工学系研究科修士。米国スタンフォード大学に拠点を置く教育NGOにて教育事業の企画運営。(公財)松下政経塾卒業。経済産業省キャリア教育プロジェクトのモデル事業責任者を務めた後、外資戦略コンサルティングファームを経て、現職。国際協力や地方創生の領域におけるソーシャルビジネスのプロデュースを多数手がけ、JICAオフィシャルサポーターを務める。TEDキュレーターなどカンファレンスのナビゲーターとしても活躍。

